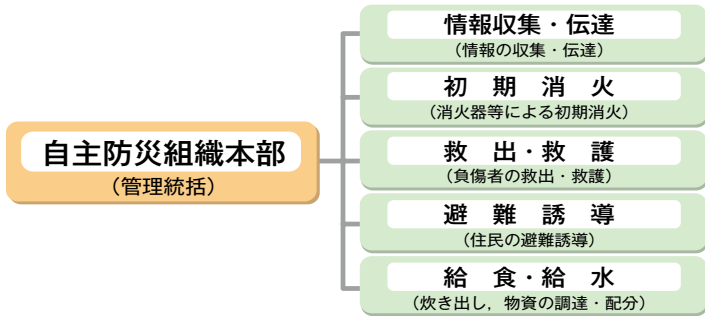


！ 地域の一員として

小学生や中学生は、一日のほとんどを自分たちが住んでいる地域の中で活動している。保護者は地域の外で働いていることが多く、災害時には地域にいないことが考えられる。今回の震災では、中学生が地域の大きな力となることが分かり、今後も様々な場面での活躍が期待されている。地域の防災について知り、自分たちが取り組めることを考えてみよう。

1 地域の防災

仙台市では、町内会を母体とする「自主防災組織」が作られており、平成26年3月現在の組織率は98.9%と非常に高い。「自主防災組織」は共助の中核となるもので、大規模な災害時には地域住民が協力して「自分の地域は、自分たちで守る。」という意識の下、災害を少しでも減らすため活動することが望まれている。災害時に地域で行うべきこととして、仙台市消防局では右図のような役割を提案している。

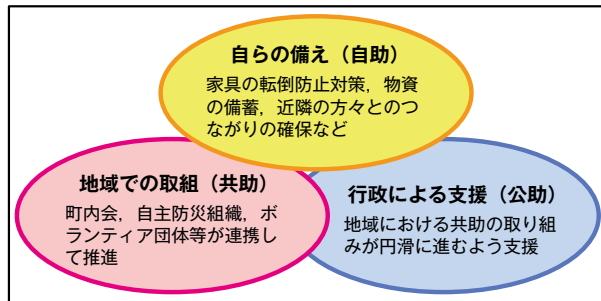


2 自助・共助・公助

災害時の安否確認や避難誘導などを速やかに行うには、自分自身が日頃から災害に備える「自助」と、地域住民同士や地域団体が連携する「共助」が重要となる。

そうした「自助」「共助」に、市や公的機関による「公助」が一体となり取り組むことが大切である。また、「共助」には、日頃から地域の状況について関心を持つことが必要になる。

災害時にまず重要なことは、自らの身を守る「自助」であるが、地域で行われている様々な活動に積極的に参加するなど、近隣の方とのつながりを大切にして「共助」の体制も築いておくようにしよう。



3 保健師さんの記録から

若林区の避難所における保健活動の報告書には、以下のような内容が記されている。

担当した避難所には、蒲生地区から自衛隊に救助された多くの避難者がいました。津波によって自宅や農地が流失した人がほとんど。着の身着のまま、着替えもない状況でした。健康相談をすると、頭がかゆい、身体が温まらない等の訴えが増えてきており、清潔面の保持が必要でした。入浴の支援が早く始まることを願っていました。それから数日後、地域の方が訪ねてきました。「オール電化住宅で、水道と電気が復旧したので入浴できる。避難所にいる方に入浴してほしい。」とのこと。案内等はできないが、自宅まで来てもらえばお風呂を提供するというものでした。

この有り難い提案を目の前に、避難者をどうやってその方の家まで連れて行くかが課題でした。避難所からその方の家までは徒歩15分の距離。土地勘がなければ迷う道です。保健師の私が持ち場を離れて行くことはできませんでした。そのとき頼りになったのが、避難所運営の手伝いをしていた中学生です。「お風呂を提供してくれる人がいる。でも避難者の皆さんは道が分からない。往復の案内をしてくれる人が必要なの。」そう伝えました。中学生たちはまず希望者の受付簿を作り人数の把握をしました。次に四人ずつのグループを作り効率よく案内する方法を考え出しました。自衛隊や仙台市の入浴支援が始まるまでの間、この方法で多くの方が入浴できました。お風呂を提供して下さった地域の方と「お風呂提供者と避難所の道り」をつないだ中学生たちに、心から感謝しています。

中学生の活動が効率的にできたのは、なぜだろうか。また、「共助」のために私たちはどんなことができるだろうか。



町内会のみなさんと一緒に防災訓練に参加

炊き出し訓練をする長命ヶ丘中生